平成二十一年度読書感想文コンクール作品集

もさく

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

目　次

講　評・その他　　一般科目　国語科教員　相本正吾　……1

入選　第一位　『図書館の神様』を読んで　制御情報工学科　二年　浅野早紀　……2

入選　第二位　『ぼくは勉強ができない』を読んで　制御情報工学科　三年　濵田恵理　……3

入選　第三位　『100回泣くこと』を読んで　制御情報工学科　二年　秋吉優子　……3

佳作　『縞模様のパジャマの少年』を読んで　機械工学科　二年　帆秋陽介　……4

〃　『彼女は帰星子女』を読んで　電気電子工学科　二年　立川亮太　……5

〃　『リアル鬼ごっこ』を読んで　都市システム工学科　二年　亀井聖平　……6

〃　いつも周りにいてくれる人のありがたさ
—『ONE DAY 死ぬまでにやりたい10のこと』を読んで　都市システム工学科　二年　高野安見子　……6

〃　『人間失格』を読んで　機械工学科　三年　米澤侑生　……7

〃　『五体不満足』を読んで　電気電子工学科　三年　安達隆太　……8

〃　スタインウェイの音
—『スタインウェイ物語』を読んで　制御情報工学科　三年　松下達也　……9

編集後記　学生図書委員長（制御情報工学科　四年）　梨子木亮太　……10

校内読書感想文コンクール（平成二十一年度）

講　評・その他

一般科目　国語科教員
相　本　正　吾

本年度は、担当国語教員により各クラスから選ばれた優秀作を対象にして、教員図書委員及び学生図書委員による第一次・第二次審査、国語教員による厳正なる第三次審査を経て、「入選作」の三作（第一位～第三位）、「佳作」の七作が選出されました。

第一位に輝いた浅野さんの『図書館の神様』を読んで」は、文芸部顧問の活動の中で部員の物の見方に触れて新しい世界を知っていく女性高校講師の物語を通して、自分の側の「正しさ」を押し通すのではなく自分らしく生きているお互いの立場や人格を認め尊重し合って共存していくという私たちにとって大事で大きなテーマを考察して好ましい作品になっていて選考の審査員の共感を得たようです。

第二位の濵田さんの「『ぼくは勉強ができない』を読んで」は、勉強がよく出来ることよりもさらに大事なことを考え、自己のありようについて悩んでいる主人公の姿や考えに触れて、自分というものをしっかり持った魅力ある人間になりたいことを濵田さんは述べ、主人公とともに「自然体」とはどういうことかについて考えをめぐらしています。濵田さんの生きていく姿勢がしのばれる作品になっています。

第三位の秋吉さんの「『１００回泣くこと』を読んで」は、自分の大切な相手と過ごす幸せを得ながら病気でその相手と死に別れてしまった物語を読んで、私たちは大切な相手を亡くした悲しさとつらさに直面した場合どう対処していくのかについて考え、日常の良いことも悪いこともその現実をやがて受け入れて私たちは成長していくのだとする秋吉さんの考えには襟を正して見るべきものがありました。

佳作となったほかの七つの作品も、内容や表現において入選作に迫る出来を持った秀作が揃いました。ナチス・ドイツによる第二次世界大戦中のユダヤ人迫害のことや双方に属する二人の少年がユダヤ人収容所のフェンス越しに友情を育んだ話から学んだことを語った帆秋君の作品、少年と宇宙で生まれた少女とが仲良くなれた物語を読んで他人とどう仲良く付き合っていったらよいかについて考えた立川君の作品、王がその暴政で同姓の国民を次々と殺していくという寓話を読みその過程で人々が助け合ったという人間の良い面に注目した亀井君の作品、余命が一日となってしまう事件に巻き込まれてその一日を送る主人公と周囲の人たちの絆の話に触れて周りの人たちへの感謝の念を新たにしたという高野さんの作品、自意識過剰で潔癖過ぎて周りや世間とうまくいかず破滅的な人生を送ってしまった主人公のことに思いをはせた米澤君の作品、身体障害の人と周りの人たちの協力体制の話を読んで本当の意味での協力とはどういうことかにについて考えた安達君の作品、スタインウェイ（ヨーロッパの三大ピアノの一つ）の制作者たちが第二次世界大戦時に戦争武具の生産ラインに就いた話を通して私たちの労働のありようについて考えた松下君の作品、いずれの作品も、表現面も含めて読みごたえや味わいがあり、読む私たち側に大事なテーマや課題を深く考えさせてくれる作品となっています。

ある文学者が、読書とはその本の著者やその本の内容との終わりのない長い対話であると述べていますが、読書というものの大事なありようや面を述べた含蓄の深い言葉でしょう。読書の取り組みによりこのたび作成した本年度の読書感想文や日常の読書の取り組みがその読んだ本との今後も続いていく実りある対話となっていくことを期待したいと思います。

来年度の校内読書感想文コンクールに向けて目標や志のある学生の皆さんは日頃から広い読書と文章作成の研鑽に励んで入選を目指してもらいたいと思います。また、四・五年生の皆さんの自主投稿や入選も期待しています。

入選 第一位

『図書館の神様』を読んで

制御情報工学科　二年
浅野早紀

この小説の帯には、「爽やかな青春物語」と書かれている。しかし主人公は二十代の高校講師の女性だ。そして彼女を取り巻く環境は爽やかとは言い難い。過去のトラウマ、ずるずると続く不倫、好きで就いたわけではない職業、文学に興味がないのに文芸部の顧問。しかし読了後に思うのは、確かにこれは青春小説である、ということだ。

高校時代の主人公は「正しさ」を信じてふらつかずに生きていた。しかしそれは同級生の自殺の一因になってしまうという大きなトラウマを負うきっかけにもなってしまった。正しさとは何か、と問われたなら私はうまく答えることができないだろう。まず私が考える「正しさ」は正しいのだろうか、という言葉遊びのような疑問を抱いてしまう。それでも私たちは生きていく上で、自分の中にある「正しさ」を道標にしていかなければならないのだ。それなら人によって多少の違いがあってしかたがない。では、なぜ主人公は自分の「正しさ」を信じて歩んできた道を疑わなければならない状況になったのだろうか。これに対して作者は主人公の弟の「きっぱりさっぱりするのは楽じゃん。そうしてれば正しいって思えるし、実際間違いを起こさない。だけどさ、正しいことが全てじゃないし、姉ちゃんが正しいって思うことが、いつも世の中の正しさと一致するわけでもないからね」という言葉にのせて答えていると思う。主人公の「正しさ」は独りよがりな部分があった。私は、小説の中で見せられる様々な「正しさ」を見て、人や時代、場所、今までの経験によって「正しさ」は異なるのだとわかった。

文芸部のたった一人の部員である垣内君は、文芸部に誇りを持っている。しかし彼は自分の考えを絶対的な正しさとは思っていない。それは高校時代の主人公の姿とは対照的である。運動は好きだが文学が楽しいという垣内君のことが、バレー一筋であった主人公は当初、理解できないと言う。しかし、私は垣内君の気持ちがよくわかる。私も文芸部に所属しているからだ。だから、主人公に対して押し付けるわけではなく、垣内君が自然に文学の楽しさを伝えていく場面はとても嬉しく感じた。自分が所属していても感じる小さな劣等感が拭い去られる気がした。大きな大会や合宿はなくても、私たちは確かに部活をしているのだ。主人公は文芸部の顧問になって新しい世界を見ることになる。否定的だった主人公が文芸部を馬鹿にする先生方に怒りを抱く場面は、私にとっては嬉しく、彼女が「正しさ」から解放された瞬間だったと思う。

世界にはきっと私が考えている「正しさ」とは違う複数の「正しさ」が存在しているだろう。私が楽しいと感じることを、楽しいと感じない人もたくさんいるだろう。でも、きっと大切なのはそうしたことを噛み締めながら、自分らしく生きることだと思う。周りにいるのもまた、自分の「正しさ」を持った人々なのだ。

入選 第二位

『ぼくは勉強ができない』を読んで

制御情報工学科　三年
濵田恵理

そのタイトルに何となく引きつけられた。この物語は主人公「秀美」の視点で描かれている。秀美は、自分のことを「勉強ができない人気者」と断言する男子高校生。ちょうど私と同い年だった。秀美は、周りを取り囲む人々との関わりの中で、色々なことを感じ、考えて、結果、自分自身を見つめていくことになる。

秀美は、本の中でこんなことを言う。

「しかしね。ぼくは思うのだ。どんなに成績が良くて、りっぱなことを言えるような人物でも、その人が変な顔で女にもてなかったらずい分と虚しいような気がする。女にもてないという事実の前には、どんなごたいそうな台詞も色あせるように思うのだ。」とか、「いい顔をした人物の書く文章はたいてい面白い。」と。…面白い。この言葉につきる。そして同時に、私もいい顔になりたいと思う。整形して、かわいくなるとか美人になるとかではなくて。自分の思うように生きて、色々経験して、自分をしっかり持った深い人間になりたいと、秀美の言葉から改めて感じた。

そんな一方で秀美は、あることにより「自然体」とは何かと悩む。「もしかしたら、ぼくこそ、自然でいるという演技をしていたのではないか。変形の媚をまとっていたのは、まさに、ぼくではなかったか。ぼくは媚や作為が嫌いだ。そのことは事実だ。しかし、それを遠ざけようとするあまりに、それをおびき寄せていたのではないだろうか。人に対する媚ではなく、自分自身に対する媚を。」と。

自然体―とは？漠然としていて、よく分からないし、その状態でいることは本当に難しいことではないかと思う。

私は小学生の頃、似たように「素直」とは何かと悩んだことがある。「素直」は、例えば「素直で聞き分けの良い子」とか、「自分に素直な人」などの様に使用される。素直って、人の言うことに逆らわない状態のことか。それとも自分の感情に正直で、わがままなことか。悩んだが、今の私は、「自分の正義や感情、経験、人の意見もふまえた上で、きちんと向き合って答えを出す」ということが素直だろうと考えている。

そして、「自然体」も同じような状態であると思う。

今回、私はこの本を読んで、まだ私は大人ぶらなくていいんじゃないか。もっと自信を持って悩みながら生きたい、と感じた。

入選 第三位

『100回泣くこと』を読んで

制御情報工学科　二年
秋吉優子

私はこの物語を読んで、日常で起こる良いことも悪いこともきちんと受け入れ、いかに時間を大切にすることが大事なのかということに気づかされました。

バイクのエンジン音が大好きだった愛犬のブックが死ぬかもしれないと実家から連絡が来た藤井君は、「バイクで帰ってあげなよ」と彼女に言われる。ずっと乗っていなかったバイクは修理が必要だった。彼女と一緒にキャブレターを分解し、そこで彼女にプロポーズをする。バイクは復活し、ブックも回復した。彼女と過ごす日々に幸せを感じていく藤井君に私は、あたたかい感情がわきました。

そんな幸せな日々の中、彼女が、がんであることがわかる。抗がん剤の投与が始まり副作用に苦しむ中で彼女は藤井君に「だいたい一ストーンぐらい」体重が減ったと笑う。藤井君に心配をかけたくないという思いがよく伝わってきました。「彼女は立派な人だ。」と言う藤井君にとても共感できました。治療が困難になってきていることを知り、藤井君は職場でいらつき、トラブルに腹を立てる。彼女が頑張ってい

るのに自分はここで何をしているのだろう、と一人トイレで声をあげて泣く姿は痛々しくとても悲しい場面でした。

「元気になりたい。」

彼女の言ったこの言葉に藤井君はただ励ますことしかできない自分を責める。その三日後に彼女は亡くなり、彼は毎晩、酒をあおるようになる。私も彼の気持ちはよく分かりました。恋人を亡くす人、家族を亡くす人、友人を亡くす人。世の中では毎日誰かが亡くなり、その人を大切に想っていた誰かが涙を流す。私はそのことがどれほど悲しいことか、改めて実感しました。

彼女が亡くなってから二年がたった頃、藤井君は彼女が亡くなっても時間は流れているのだと気づく。久しぶりに丁寧にコーヒーを淹れる。彼女の私物を片付け、押し入れの奥にしまう。まもなくしてブックが亡くなり、藤井君は実家に戻る。ブックを河原に埋め、バイクを廃車にすることにした。彼は彼女の死を受け入れて生きていくことを決意したのだなと私は思いました。

生きている以上、大切な誰かを失い悲しむことも誰かを悲しませることもあると思います。でもそれを受け入れ、現実を見て生きていくことができれば、きっと人は成長するのだろうなとこの本を通して思いました。

佳作

『縞模様のパジャマの少年』を読んで

機械工学科　二年

帆秋陽介

「あの連中は……。そもそも、連中は人間でもないんだよ。」

これは、主人公ブルーノに父親が言った言葉だ。私は何故このような言葉が出てくるのだろうかと思った。自分の本心からそう思っているのか、それともただ単に、自分よりも力をもつ者から言われ、そう思い込んでいるだけなのか分からなかったからだ。

この物語は、二人の少年の友情が描かれている。ナチス・ドイツの司令官の子ブルーノと、ユダヤ人の子シュムエルだ。本来ならば関わることなど無いはずの二人。しかし、彼らは出会い、そして収容所のフェンスでへだてられながらも、強固な絆を築きあげる。

第二次世界大戦中、ナチスはユダヤ人を強制収容し、大虐殺を行った。殺された人の多くは子供、女性、老人、病人といった労働力にはならないとみなされた人達であった。それはまさしく悪夢のような出来事だっただろう。おそらく私がいくら考えても、彼らが感じた恐怖や怒りの感情を、真に理解することはできないと思う。

しかし、このような時代の中で友情は生まれた。私は何故だろうかと考えたが、そこには何ら特別な理由は無いように思われた。なぜなら、二人はただ純粋に友達が欲しいと思っただけのように感じたからだ。では、何故実際にユダヤ人を手にかけていた軍人の多くは、二人のような感情をもてなかったのだろうか。私には軍人達は、その時代の流れに流されているように思えた。

ドイツでは、ヒトラーによって強力な独裁政治が行われていた。国民は自由な思想をもてず、国から出て行く者もいた。こういった時代の中で、独裁政治の影響を一番多く受けたのは、軍人達だったのではないだろうか。力ある者からの命令には従わなければならず、そういった流れに流される内に、自分達は強い人間なんだと勘違いし、悪魔のようになった者達も多くいたと思う。私は、人が簡単に変わってしまうことに恐怖を感じた。

私がこの物語と出会って二つ学んだことがある。一つ目は、どんな時も自分自身の中にある芯を無くさないことだ。「誰かがこう言ったから、自分もそうした。」などという考えは無くし、自分の考えをもって行動できるようになりたいと思った。二つ目は、常に誰かを労る心をもつことだ。それは、一方的に哀れみをもって接するということではなく、相手が傷ついたら自分が、自分が傷ついたら相手がというように、お互いに想いやりをもって接するというこ

とだ。この二つは、誰にでもできることだと思う。

私も、ブルーノとシュムエルのように、永遠に変わらぬ友情をもてるようになりたい。

佳作

『彼女は帰星子女』を読んで

電気電子工学科　二年
立川亮太

「他人と仲よくなれるって、すごいなぁ。」

この本を読んで最初に思った感想がこれでした。

「彼女は帰星子女。」「国」のところが「星」となっているこの本は、宇宙で生まれた少女が地球の少年宅に住むことになる。という物語です。この少女は宇宙人と地球人の混血ですが、地球人よりの体をしているため、宇宙人からは「地球人」としてあつかわれ、宇宙船での居場所がありませんでした。一方地球では「宇宙で生まれた」ということで宇宙人あつかいされ、地球にも居場所がないと思っているようでした。

そんな少女と一緒に住むことになった少年は、始めこそギクシャクした接し方をしていましたが、次第に少女と仲良くなり、「家族」として受け入れます。

僕はこの少年がすごいなぁと思いました。なぜなら「他人」を受け入れるというのは、簡単なことじゃないからと思うからです。「他人」とは、実際、さまざまな「壁」があります。歳や性別、人種などなど。その人のことを知らないということだけでも壁を感じてしまうものと思います。僕は夏休みに補助員として参加した中学生の合同合宿で、韓国の中学生とふれ合う機会を得ました。が、内気な僕は通訳の方を通して仲良く会話することができたものの、「言葉」という壁をどうしても感じてしまい、心にもやもやとしたものが残ってしまいました。

どうしたらその壁を取り除くことができるのか。どうしたら他人と仲良くなれるのか。僕はこの小説を読んで、考えました。その答えは「時間」だと思いました。

なぜなら、先の韓国の中学生とだって、時間をかけて韓国語を学べば言葉の壁を感じなくて済むと思うからです。それに言語でなくとも、身ぶり手ぶりで意味が伝われば、あとはもう少し長く交流できたらそんな壁がどうでもいいくらいに仲良くなれた、と思うからです。

宇宙人との混血という少女と主人公である少年との間には、大きな壁があったのではないか、と思います。それも、何かあれば地球規模の問題にもなりかねないので、責任も重大。少年へのプレッシャーはとても大きかったのだと思います。

そんな中、時間をかけて少女と仲良くなった少年は、すごいなぁと思いました。

佳作

『リアル鬼ごっこ』を読んで

都市システム工学科　二年
亀井　聖平

この本は、簡単にいうと題名通り『鬼ごっこ』を現実のものとした『リアル鬼ごっこ』を中心としてのさまざまな人間関係を表しています。リアル鬼ごっことはある国の王様が始めたゲームで、国内にいる王様と同じ名前の佐藤を鬼が捕まえるという内容です。通常の鬼ごっこと違う所は鬼に捕まると殺されてしまう事です。

この本の始まりは王様の思いつきから始まります。その思いつきは国内の増えすぎた佐藤の数を減らしていくという物でした。王様は王様と同じ名字の人間がたくさんいる事がはがゆかったようです。そしてこの思いつきから発案されたのがリアル鬼ごっこです。

主人公は名字が佐藤のためこのゲームにまきこまれていきます。この本のいい所は人々が危機に直面した時にそれぞれがそれぞれを助けようとする人間のいい所を表している所です。主人公は鬼ごっこ中に自宅に帰ると飲んだくれの父親がいました。この父親は飲んだくれであり、家族に暴力をふるったりする最低の父親でした。その父親も名字は佐藤で、鬼の対象となっています。ですが彼は逃げずに家で酒を飲んでいました。主人公が父親に逃げるように説得していると、家に鬼が突入してきて、主人公は捕まりかけます。それを助けたのがあの飲んだくれの父親でした。そして父親は主人公を逃がすために捕まってしまいます。その後主人公は鬼から逃げながら妹を探しはじめます。そして、妹をみつけだし共に逃げはじめます。ですが共に逃げていた妹も捕まってしまい、絶望した主人公は逃げるのをやめてしまいました。逃げる事をやめた主人公のもとにはすぐに鬼がやってきました。だが、それと同時に鬼ごっこが終了しました。国内の佐藤が主人公と王様を残しすべて捕まってしまったのです。ゲーム終了後さっきまで本物の鬼のごとく追いかけてきた鬼が涙を流していました。鬼は主人公にある物をわたしてさっていき、その後主人公は王様のもとへとつれていかれました。王様は最後まで生き残った主人公の願いを一つ聞くと言いました。そして主人公が言った願いは、

「王様、死んでください」

というものでした。それを言うと同時に主人公は銃を出し王様を殺しました。そして主人公も警備に殺されてしまいます。

この本は人間のいい所を表している所で、人間感情という物をよく表しています。だから私はこの本が大好きです。

佳作

いつも周りにいてくれる人のありがたさ
―『ONE DAY 死ぬまでにやりたい10のこと』を読んで

都市システム工学科　二年
高野　安見子

この本の中での主人公テッドは、ある日、いつもの仲間といつも行くお店で、いつも注文するフライドポテトを食べていた。しかしその日食べたフライドポテトには、その店に恨みを持っている人によってもられた大量の毒が入っていた。そのことを食べた後に知ったテッド。そして医師から二十四時間以内に死ぬと宣告される。そこから彼の人生最後の一日、ONE DAYがはじまる。

彼の最後の一日をどう過ごすか、やりたいことを十個決め、それを実現のものとしていく。彼も実現するために努力するが、周囲の友達は、彼以上に彼のことを思い、彼の最後にやりたいことを現実のものとするために全力で協力する。そんな彼の友人に彼が感謝の気持ちを述べ、「僕にとって君たちは家族以上の存在なんだ。」と伝える。私は、このテッドの行動から、自分はきちんと周囲の方々へ感謝できているのか考えさせられた。思い起こせば、最近の私の母への態度は、あまりにも反抗的だ。毎日まいにち、母は私のために働いて、家事までしてくれている。それなのに、母から「～しなさい」

と言われた時に素直に「はい」と言えない自分がいる。そんな自分に嫌気がさす。いつも私のそばにいてくれる母。幼い時ほど一緒にはいれないけれど、あの時と少しも変わらない母の愛情。私はもっと素直に感謝の気持ちを伝えれる人になりたいと思った。それに先日あった全国高専大会では仲間のありがたさを改めて感じることができた。ソフトテニス競技で、全国大会に出場できることとなり、監督一名、選手二名の計三名で鹿児島に行った。全国から来ているどの選手もみんな同じホテルに泊まったため、少しだが話す機会があった。そしてたくさんの人と友達になれた。次の日、いよいよ試合で緊張していたし、応援がいなかったため心細かった。しかし、試合前の乱打をしていると、友達になった他県の人や、監督そして同じ九州の選手がぞくぞくと増え出し、声を張り上げて応援してくれていた。それを見て、試合前に思わず涙が出そうになり、仲間のありがたさをひしひしと感じた。

　このような出来事もあり、私がもしテッドで、あと二十四時間で死ぬと言われたら、今まで出逢った全ての人に感謝の気持ちを伝えたい。そう思った。ＯＮＥ　ＤＡＹを読んで、改めて周りの人々への気持ちを考えることができた。これまで以上に周りの人を大切にして、感謝の気持ちを忘れずに生きていこうと思った。

佳作

『人間失格』を読んで

機械工学科　三年

米澤　侑生

「人間失格」を読んでまず思ったことは、主人公は考えすぎているということでした。この主人公は、人間の本性など考えなくても良いことまで考えてしまうことによって幼少時代を苦しいものにしてしまったのだと思いました。僕の場合は人と接するときにその人が裏で何か思ってはいるだろうと思っても特に気にすることはなく接することができます。しかし、主人公は人と接するとき深読みし過ぎて自分自身を追いつめてしまい結局は道化に走っていたんだろうと思いました。

　中学校では、自分の道化を見破った竹一と友達になり「お化けの絵」を通じて仲間を見つけ、仲間がいることによって主人公の気は随分楽だっただろうなと思いました。

　旧制高校では遊び仲間の堀木と出会い、酒や煙草、淫売婦や共産主義に入り浸るようになり人間の見たくないものから逃げようとするがそのしがらみさえも嫌になり一人の女の元へ逃げる。この部分は主人公がとても自分勝手だと感じさせられました。そして主人公は人妻と心中をして自分だけ生き残ってしまい犯罪者になってしまう。主人公はこの事件によって犯罪者というレッテルを張られてしまい人生を余計に送りにくくしてしまったなと思いました。

　堀木とのやり取りの中で主人公が「世間」というものに気付いた時はとても印象的でした。「それは世間がゆるさない」「世間じゃない。あなたがゆるさないのでしょう」というのは読んでいて妙に納得してしまいました。世間はあなただという発想はとてもおもしろく僕には出来ないだろうなと思いました。

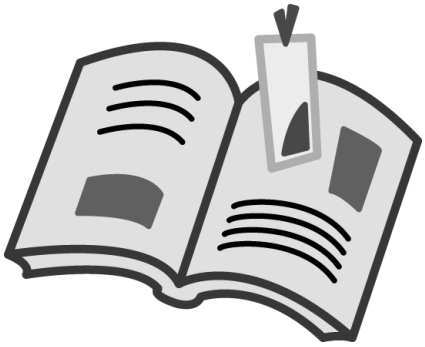
　そして、最後に求めた無垢な信頼心を持った女性も失って酒に走り、ついには発作的に自殺未遂を起こしてしまう。この時の主人公の頭の中は絶望がほとんどを占めていたと思います。僕はそんな絶望は体験したこともないし、体験したくないと思いました。

　最後にはモルヒネにまで手を出しモルヒネ中毒になってしまう。ここまで読んで、主人公は落ちるところまで落ちたなと思いました。

　最後に故郷に帰った主人公と女中とのやり取りはこの絶望の多かった物語から考えると何だか心が和み不思議な感じがしました。主人公を束縛していたものがすべてなくなり、結果として良かったような印象を受けました。

　主人公は「人間失格」になってしまった。しかしそれは他の人から見た話であって実際には今まで苦悩してきたものは一切なくなり、本人からすれば新たな人生を始めることができたのだと思います。人生はいろいろなことがありな

がらもただいっさいは過ぎていく。そんな当たり前のことがこれだけの経験をした主人公の言葉だと考えると何だか感慨深くこれからの人生で何かあった時に思い出してみたいです。



佳作

『五体不満足』を読んで

電気電子工学科　三年
安　達　隆　太

先天性四肢切断。この本の著者である乙武洋匡さんは生まれつき手足が不自由である。不自由というより手足が無い、という方が正しい。手が無い人に本を書けるのか、そういう事を思う人もいるだろう。また足がないのに動くことができるのかという人もいるかもしれない。しかし、乙武さんは書く事、歩く事に困っていない。鉛筆を肩とアゴではさめば字を書くことができ、体をひきづれば動ける。もっと早く移動しようと思えば電動車椅子を使用すれば良い。事実、乙武さんはこういった様々な工夫をこらすことによって社会における障害を突破していったのである。

しかし残念ながら周りの目は厳しかったようである。入学の許可がおりなかった事もある。学校生活では他の子と比べられるのではないかと正直僕は思っていた。特に小学生の低学年は無邪気で純粋であるが、その純粋な心がかえって人を傷つける。例えば、クラスの中に一人だけ手足がなく電動車椅子に乗った子がいるとする。他の子は何の悪気もなく、その子に尋ねることだろう、なぜ手足が無いのかと。

しかし、乙武さんは何度も説明をくり返したらしい。そしてしだいに友達が協力をしてくれるようになる。これは、乙武さんへの介護なのではなく、あくまで必要最低限のことだけを手伝うといった形であった。これは非常に大切なことだと僕は思う。なぜなら、障害を持つ人が依存してしまうためである。自分のことは自分でやる。しかし、どうしてもできないときは他の人に助けてもらう。これが本当の意味の協力ではないだろうか。またこれは障害者だけではなく健全者にもいえるのではないだろうか。

この五体不満足という本を読んで思ったことはこれは障害というハンディを背負った人々のためだけではなく一般の健全者の人々のための生き方の参考書ではないだろうか。人とどう接するか、どう協力するか、日々の生活でのとても大切なことを教えてくれる本であると思う。

障害は不自由だが不幸ではない。乙武さんのこの言葉が社会全体に広まるような時代になっていくことを僕は信じたい。

佳作

スタインウェイの音
―『スタインウェイ物語』を読んで

制御情報工学科　三年
松　下　達　也

スタインウェイといえば、ヨーロッパの三大ピアノの一つとして有名である。現在のほとんどのコンサートホールに設置され、ピアニストの八割強がスタインウェイの文字を前にして鍵盤に手をそえている。この本はそんなスタインウェイの歴史をつづった本だ。

言うまでもなく、僕はピアノが好きである。小学生のころから習い始め、合唱コンクール、部活動、発表会などを通してピアノと触れ合ってきたので、この本に興味をもった。

読み終わってから第一に印象に残ったのは第二次世界大戦との関わりだ。ピアノをつくるための木材などはほぼ全てが戦争のためにとまわされたので、銃の部品などで採算を合わせるしかなかった。

今までピアノをつくっていた人たちが、短期間のうちに戦争武具の生産ラインを構築し、適応したことに感嘆させられる。それでなくても兵として労働者が少なくなり、女性が代わりのように働き、場の雰囲気もかなり変化したであろうにも関わらず。

当時の人々は自らの職というものに対して、果たしてどのような思いを持っていたのかと考えさせられる。誇りだろうか。稼ぎの執念だろうか。それとも――？

いずれにしろ、現代の私たちのそれとは大いに違う。昔の彼らは給料も上がらず、切り捨てられるように解雇されたりもした。しかしあきらめなかった。彼らは再雇用させられたり、ストライキで労働組合を立ち上げたりした。そして働いた。

今の僕らの環境は違うような気がする。

「良い職につけ。」

良いとは何だろう。誇ることか。稼ぐことか。勝つことか。では負けとは何なのか。誰が決めたのか。

不景気という霧は、おそらく、想像以上のものをかくしてしまった。スタインウェイがCBSに売却されてしまった要因の一つは、社長の子供らがピアノに対して無関心であったからだそうである。

真剣に働く人は、美しいし、なんだかカッコ良い。同じ職場の人同士で一つの楽器をつくり上げていく。そんな技術者像は目標にあって然るべきなのかなとも考えた。自分にとって労働とは何かとも考えた。そしてちょっぴり、答えが分かったかもしれない。

黒い楽器の前に座って彼らのことを考えると、何だか胸がうずうずする。

答えは案外身近にある。目前の鍵盤を押して、ぽんと出てきた答えを聞くと、僕にはどうしても、どうしても次の二打目をつい優しく弾かずにはいられなくなるのです。

編集後記

学生図書委員長（制御情報工学科四年）
梨子木　亮　太

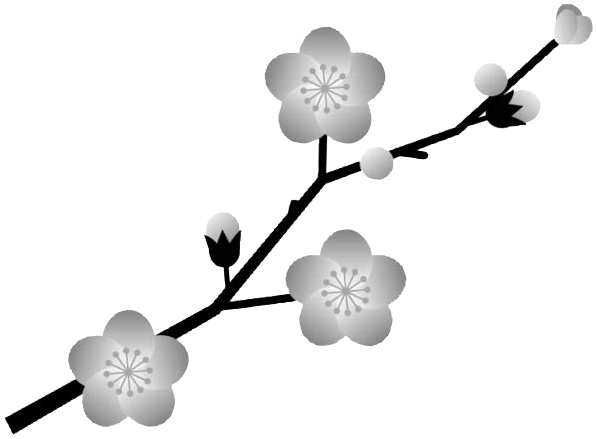
本を読むということはとても良いことです。知識がつく、想像力が豊かになる、本を読むことによって得られるものはたくさんあると思います。その中でも自分がとても素晴らしいと思うのは「新しい考え方に出会える」ということです。読書を通して読み手は著者の考え方に触れることができます。読み手と著者の考え方が似ている場合、共感などが得られたり、考え方が異なる場合、別の意見が生まれたりします。このような本との「対話」を通し、柔軟な心や豊かな人間性は育っていくのではないかと思います。ぜひ、みなさん積極的に本を読みましょう。

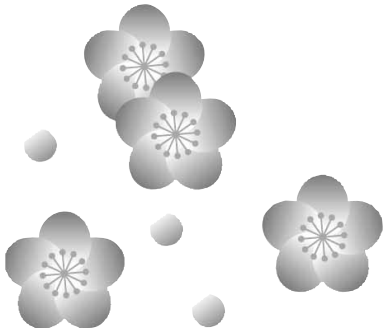
さて、今回の校内読書感想文コンクールですが、自分も審査員に加えさせていただきました。入賞者に比べれば全く作文能力のない私ですが、その自分から見てもとても良い作品が多く、点数をつけるのがためらわれるほどでした。

全体的な感想として、今回の作品はどれも「自分の考え」を伝えるのがとても上手だったと思います。伝えたいことがはっきりと伝わってくる作品が多く、非常に考えさせる作文ばかりでした。加えて文章の作り方がうまく、引き込まれて見入ってしまうような作品もありました。入選はしなかった作品もどれも個性的で、見ていて楽しいものでした。

高専という学校は理系の人の多い学校です。今回の作品を見て、理系だからと言って作文能力が低いというわけではないということを改めて感じました。今回選ばれた作品は全員が三年生以下ですが次は四、五年生もぜひ作品を投稿して、入選させてくれるといいいなぁと思います。きっとこれまでのレポートで付けた力が役に立ってくれるでしょう。ご応募お待ちしております。

最後になりましたが、校内読書感想文コンクールを開催するためにご尽力を尽くしてくださいました先生、関係者の皆様、作品を投稿してくれた生徒の皆様、本当にありがとうございました。本の感想を共有するということはとても楽しいことです。このイベントが少しでもみんなの楽しさにつながることを願い、編集後記とさせていただきます。





「もさく　第三十七号」

発行日　平成二十二年三月一日

発行者　大分市牧一六六六番地
大分工業高等専門学校
学生図書委員会
図書館運営委員会

印刷所　株式会社明文堂印刷
住　所　大分市長浜町一丁目二－二
電　話　〇九七－五三三－八八〇〇